イギリスの文化度

公益社団法人　全国公立文化施設協会
専務理事　松　本　辰　明

昨年の１１月末から１２月上旬にかけて、イギリスの劇場視察にでかけた。

全国から研修生を募り、論文審査にパスした七名とオブザーバー参加を含む１２名を引率して、スコットランドを起点に南下しロンドンに至るハードな日程であった。

一時は、パリでのテロ事件を受けて実施が危ぶまれたが、その時点では英国がシリア爆撃に参戦していないこと、高い警戒レベルにはあったが、イギリス国内は比較的平穏であることなどを考慮して、実施に踏み切った。

バスで移動しながら、エディンバラ、グラスゴー、ダンディー、シェフィールド、リーズ、ストラトフォード、ロンドンの各都市にある劇場を中心に巡った。どの劇場も作品制作と公演を行いつつ、同時に文化・芸術を活用した地域の課題解決のための取組を積極的に進めていた。子どもや若者を対象とした教育プログラム、高齢者や障害者はもとより、認知症患者やホームレス、なかには刑務所を出所してまもない人々を対象にしたプログラムを用意している施設もあり、新鮮な驚きであった。劇場には必ずと言っていいほど、飲食を提供するカフェやレストランがオープンスペースに設置されており、多くの市民が集い活動する姿があった。

そう、ここに理想的な劇場の姿があると感動さえ覚えた。

全国に二千以上ある日本の劇場やホールのなかで、日常的にそうした光景がみられる施設がどのくらいあるだろう。公演があるときは活況を呈するが、その他は閑散としているという印象が強い。また、市民活動への場の提供や学校へのアウトリーチも行っているが、劇場主体の地域貢献活動となると、あまり多くない。

イギリスでは劇場という存在が人々の生活により身近で、文化・芸術は人の精神の成長にとって重要であり、よりよく生きるために不可欠なものという確固たる信念があるような気がする。

明治以来、日本は西洋から多くのことを学んできたが、文化・芸術の真の活かし方については、抜け落ちていたのかもしれない。

今回の旅は劇場を通じて、文化・芸術が人々の日常に浸透している様を体感した旅であった。そして同時に、これからしっかりと自らの足元を見つめ、劇場・ホールが、地域の人々とつながりながら、何をなすべきか、何ができるかを改めて考えさせられる機会ともなった。

研修生は実に周到に準備し、現地の視察とヒアリングではそれぞれの役割を十全に果たし、さらには全国アートマネジメント研修会での発表も堂々とこなし、期待以上の成果があった。あらためて、研修生の皆様の労をねぎらいたい。